

# 墨田区総合教育会議 議事録

## 1 日時等について

開催日	令和6年1月30日（火）		
場所	区議会第1委員会室（区役所17階）		
開会時刻	午前10時00分		
閉会時刻	午前11時30分		
出席者			
区 教 教 教 教	育 育 育 育	長 長 員 員 員	山本 亨 加藤 裕之 阿部 博道 岸田 玲子 岡田 卓巳 小山 勉
説明のために出席した職員			
副 企 行 政 総	区 画 政 務	長 室 課 課 部	岸川 紀子 岩佐 一郎 岐部 靖文 楠 幸輔 中山 誠
子ども・子育て支援部長 子育て支援課長 子育て政策課長 教育委員会事務局次長 教育委員会事務局参事 （庶務課長事務取扱） 学務課長 指導室長			酒井 敏春 石岡 克己 秋山 和栄 宮本 知幸 浮田 康宏 西村 克己 石坂 泰
すみだ教育研究所長 地域教育支援課長 ひきふね図書館長 副参事 （学校改築計画担当）			宮本 佳代子 大八木 努 有澤 恵美子 山崎 紀之

## 2 議題について

### （1）墨田区教育施策大綱に係る教育課題について

- ・自己肯定感について（～子どもたちの自己肯定感を高めるためには～）

### 3 議事の内容について

午前10時00分開会

---

#### ◎開会の辞

○区長 ただいまから、第19回墨田区総合教育会議を開会します。

本日は、「自己肯定感について（～子どもたちの自己肯定感を高めるためには～）」について、皆さんと意見交換をしたいと考えています。

はじめに、今回の議題の選定についてお話をいたします。

区では、令和4年度に策定した基本計画、この中で、「子どもたちに知・徳・体のバランスのとれた教育を行う」とし、豊かな人間性や社会性を育むために、自己肯定感を持てるように取り組むこと、基本計画の中でもこの言葉を使用しています。

また、教育委員会においても、令和4年に策定した教育施策大綱の中で、本区が目指す子どもの将来像として、「自己肯定感を育みながら、周りの人の立場や気持ちを思いやることができる人」を掲げ、自己肯定感を高めることを目指しています。

また、令和6年度から「自己肯定感の醸成」を、主要な教育課題かつ重要課題として位置づけており、知・徳・体のバランスの取れた幼児・児童・生徒を育成することとしています。

以上の理由から、自己肯定感を今回の会議の議題として、選定することとしました。

本日は、教育委員の皆さんと意見交換をする中で、自己肯定感を高めるためには、何が必要なのか、どのようなアプローチをすればよいのか、そういうことについて、ぜひ皆さんのご意見から見い出していけたらと思っております。

---

#### ◎議題 自己肯定感について（～子どもたちの自己肯定感を高めるためには～）

○区長 まず、意見交換の前に、子どもたちにどのような力が求められているのか、なぜ求められているのか、その背景について確認しておく必要があると思っております。

まず、事務局から説明をお願いします。

宮本教育委員会事務局次長、お願いします。

○教育委員会事務局次長 私からは、これから意見交換していただくにあたって、まず共通認識として、前提となる言葉の意味を整理する必要があると存じますので、資料説明の前に国立教育政策研究所による定義をご紹介させていただきたいと思えます。

同所によりますと、定義では、自己肯定感とは、心理学用語セルフエステームの訳語とし

て定着した概念である「自尊感情」や「自己効力感」と同じ意味合いで用いられておりまして、「自分自身に満足している」、「自分にはよいところがある」などのような、自己に関する肯定的な評価のこととされております。

また、類似する言葉で「自己有用感」というものがございます。こちらも同じく自己を肯定する評価のことを指しますが、他人の役に立った、他人に喜んでもらった等、相手の存在なしには生まれてこない点で、「自己肯定感」や「自尊感情」とは異なるものでございます。

それでは、資料についてご説明いたします。

資料1をご覧ください。

こちらは、平成29年6月22日の中央教育審議会の会議資料の抜粋でございます。若者の意識に関する調査における国際比較です。

資料1の3ページ目、図11、自己肯定感（自分には、よいところがある）及び4ページ目の6既存調査の分析結果等を踏まえた考察をご覧ください。

自己肯定感が高いほうが、挑戦心、達成感、規範意識、自己有用感に関する意識が高い傾向が見られたとの分析をしています。

次に、資料2をご覧ください。

こちらは、内閣府の令和元年度子供・若者白書（概要版）から抜粋した日本の若者意識の現状～国際比較からみえてくるもの～でございます。

資料2の1ページ目、上段四角の枠内の調査結果のポイントの1つ目の丸をご覧ください。

日本の若者は、諸外国の若者と比べて、自身を肯定的に捉えている者の割合が低い傾向にありますけれども、日本の若者の自己肯定感の低さには、自分が役に立たないと感じる自己有用感の低さが関わっているとの分析をしております。

続きまして、資料3をご覧ください。

これは、OECDが2022年に実施した生徒の学習到達度調査の結果概要をまとめた資料です。この調査は、義務教育終了段階の15歳児、日本では高校1年生を対象にしたものでございまして、2000年から3年ごとに、読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーの3分野で実施しているもので、学力の国際比較ができる指標として捉えているものでございます。

資料3の1ページの中段、PISA2022の結果概要(日本)をご覧ください。

日本の成績は、いずれの分野においても世界トップレベルにあり、また前回、2018年の調査と比較しましても、2022年の調査結果は、さらに成績が上位になったとの結果が出ていま

す。

最後に、資料4をご覧ください。

こちらは、文部科学省が令和5年度に実施した全国学力学習状況調査の結果から抜粋した児童・生徒の挑戦心、自己有用感、幸福感等に関する状況に関する資料です。こちらは、学力に関する調査とともに実施した、児童・生徒の内面に関するアンケート調査の結果です。

資料4の1ページ目上段の四角の枠内、分析結果のポイントをご覧ください。

2つめの丸で、主体的・対話的で深い学びや個別最適な学びが、児童・生徒の自己有用感等に影響を与えている可能性があるとの分析をしております。

資料の説明は以上でございます。

○区長 ありがとうございます。

資料の1から4について、簡単に説明してもらいました。

数字であったり、学力の結果であったり、アンケート結果であったり、こうしたものを一つ頭に入れていただいて、これから話を進めていきたいと思えます。

まず、その前に私から、自己肯定感について少しお話をさせていただきたいと思えます。

先ほど来、基本計画にも教育施策大綱にもこの言葉があるとお話しましたが、実は、まだ自己肯定感というテーマで深掘りして議論をしたことがありませんでした。今日で総合教育会議は19回目ですが、その都度、その都度の会議の中ではこの言葉というのは出てきておりましたけれども、今回はここを抽出して深掘りしていきたいと考えています。

そして、よく加藤教育長がお話しているように、現代社会は、社会環境が急速に変化をして、将来予測が困難な時代にあるため、そのような時代を生き抜いていくんだということ、教育長さんが子どもたちにいつもメッセージを与えているように思えます。やはり、そのような時代を生き抜いていくためには、自分で考え、自ら率先して行動しなければならない、うまくいかないことや壁にぶつかることもあるというふうに思えます。

そういう中であって、自己肯定感が高いということであれば、精神的に安定したり、人からの評価を必要以上に気にしたり、誰かと比べたり、そういうことにとらわれない自分というものが確立をされて、自分の目標を持って、それに向かって努力をして困難を乗り越えていける、こういう力なのだと思います。

そういうことで、この自己肯定感というのを醸成し、高めていくということは、非常に子どもたちにとっても大事なことだと思います。

自分としては、冒頭、知・徳・体のバランスの取れた教育をやっていきたいとお話しまし

たが、これは、区長就任時からずっとお話しているのですが、その中で、知であれば確かな学力、徳であれば豊かな人間性、体であれば健康な心と体、体力、こういう全ての基礎になるものが自己肯定感であって、予測困難な時代にこの力を持っているということが大事だということで、お話させていただいていました。

子どもに限らず、大人の私であっても、新年会シーズンで日々区民の皆さんと会って、いろんなお言葉を頂戴して、それが自分のモチベーションになって、毎日、次はこういうことをやりたいと考えています。やはり今の区政は良いねと褒められると、また頑張ろうという、大人であってもまさにその毎日の繰り返しという感じもします。これが、成長していく子どもについて、どのようにうまくそれを伝えて行けば良いのかということが一つのテーマだと思います。

それから、自分の個人的な話になりますが、やはり剣道です。私は56年間剣道をやっているのですが、やはり剣道の教えというのが自分の骨格になっておりまして、その中で厳しい練習を乗り越えたり、礼節を学んだり、精神力や忍耐力、それから相手を尊重するという気持ちであったり、そういうことをずっと繰り返していくことで、自分に自信を持つことができたと思っています。

さらに、チームとして、チームワークで物事を進めようと、今、区役所でも言っていますが、やはりチームの中の自分であったり、その役割を果たしていくという、自分の使命感、責任感であったり、そういうものも剣道によって養われたのかなと思います。

さて、自己肯定感について、先ほどの事務局の説明を踏まえて、皆さんとそれぞれのお考えをお聞きしながら議論していきたいと思っています。

それでは、ちょっと前置きが長くなりましたが、阿部委員から、考え方をお話いただければと思います。

**○阿部委員** 先ほど、事務局から自己肯定感の定義のお話を伺いました。また、区長から体験を含めた上での自己肯定感に関するお話を伺いました。

まず、私といたしましては、最初に、自己肯定感とはどういうものかという自分なりの認識と、それからなぜ自己肯定感について議論をする必要があるのかというあたりから入っていききたいと思います。

自己肯定感の定義については、心理学など学問的には難しい定義があるようですが、一般的な理解としては、その人の長所や短所も含めて、自分全体を価値ある存在として肯定的な評価をできる状態を自己肯定感があると言われてるように思います。私が学んできた中で

は、以前は自尊感情とか自尊自重の精神だとか、あるいは自己有用感とか、いろんな用語を聞いたように思いますけれども、私はシンプルに自分自身をポジティブに受け入れられるかということではないかと考えています。

先ほどお話が出ましたように、教育施策大綱の中にも、目指す子どもの将来像のところ、自己肯定感を育みながら、周りの人の立場や気持ちを思いやることができる人が掲げられています。それで、私なりに考えて、なぜ自己肯定感をこのように大切にすべきなのか考えたのですが、私が考える3つのポイントをお話したいと思います。

まず1つ目は、自己肯定感が備わっているということは、子ども自身にとって家庭や学校や社会での生活が安心して充実していると、要するに子どもにとって幸せな状態だということではないかと思えます。そのことが、同じく大綱の中にあるように、行く行く将来社会で活躍し、チームに貢献できる自立した人というところがありますが、それと同じように、社会の担い手として自信を持って大人として社会や地域に貢献できる人に育っていくことの源泉になるだろうと思えます。そうすることで、例えば自殺を減らしたり、ひきこもりをなくしたりというようなことにもつながるのではないかと、それがまず第1点だと思えます。

それから2つ目に、自己肯定感が育つということは、自分を受け入れて、自分を大事にするということになるわけですから、そうすると同時に自分以外の他人も同じように、その人が自分自身を大事にするということを理解できるということになると思うので、そうすると、互いに尊重し合う精神が育つのではないかと。逆に、自分を粗末に扱うような人は、強い者には卑屈になるだろうし、弱い者には傲慢になる、こんな対応になるのが必定ではないかと思えます。要は、他人を大事にするという人権感覚の基礎につながるのではないかと思えます。結果として、そういう感情が育てば、いじめや不登校も減るのではないかと考えました。これが、2番目です。

3番目は、やはり経験的に大人になっていく過程で、いろいろ失敗したり、悩んだり、それこそ壁にぶつかったりということは、嫌でも体験するわけですが、自己肯定感を育むことで、失敗したり、思いどおりにいかない場合でも、ポジティブに目標に向かって、何とか自分の可能性を探求したり、あるいはなりたい自分を目指して努力すると、そういうエネルギーの源泉になるのではないかと思えます。

この3つあたりが、自己肯定感を大事にすべきだということになるのかなというように考えました。

先ほど区長からも剣道のお話がありましたので、私も少し体験談をお話したいと思います。振り返りますと、小さい頃に始まって、だんだん成長して思春期になって、そして社会に出て大人になってから、いろんな環境や状況、年齢に即したところで自己肯定感の中身や程度も随分変化していったと思っています。

ですから、一口に自己肯定感と言っても、幼稚園や小学校低学年、そして思春期を迎えて中学生になって、自我に目覚めてだんだん成長し、さらに大人になっていくという過程で、成長の度合いや年齢、あるいはその時々々の環境に応じた自己肯定感の育成が必要になるのではないかと思います。

そこで、議論の取っかかりとして、区長部局や教育委員会で、年代とか、あるいは生育環境によってどのような自己肯定感を育成する施策を講じられているのか、参考に教えていただき、そのあたりの課題から入ってはどうかと考えました。

○区長 まず、阿部先生から定義やなぜこのことを議論するのかというところから入って、今ありましたように、年代によってそれぞれ自己肯定感の感じ方、それから育ち方、醸成の仕方は違うのではないかとということで、初めに区長部局の子ども・子育て支援部から、次に教育委員会から取組について説明をお願いします。酒井子ども・子育て支援部長、お願いします。

○子ども・子育て支援部長 子ども・子育て支援部長の酒井でございます。

子どもたちの自己肯定感を高めるための取組ということでございますが、保育園・児童館・学童クラブでの取組の一例をご報告させていただきたいと思います。

まず、保育園についてです。

自己肯定感を育むために、保育園では日常生活や遊びの中で、子どもへの関わりを通じて、主に次のような5点ほどを1つの方針として取り組んでいる状況です。

1つ目が、環境を整える、気持ちを切り替える、失敗を否定しない、言動を肯定的に捉える、自分の思いや意志を大切にするなど、子どものありのままの姿を受け入れること。

2点目が、大切に思っていることを伝えるなど、前向きな言葉がけを心がけること。

3点目が、視線を合わせ、子どもの話をしっかりと聞く。

4点目が、環境を工夫し、できたことで自信を持たせるなど、達成感を感じられる活動を考えること。

5点目でございますが、子ども自身がやりたいことを見つけ、じっくり遊べる環境を工夫し、すぐに手助けせずに見守るなど、自主性を育てること。

例えば、遊びやすい環境として、安全を前提としながらも、いつでも自由に遊べるような環境設定を工夫し、保育士主導で出された遊具を遊ぶ環境ではなく、子どもたちの自由な選択によって遊具を選択できる環境の工夫などがあると考えています。また、そのような環境設定を巡回指導などで促し、子どもの意思を尊重するようにしているところです。

次に、児童館や学童クラブでの取組です。

学童クラブにおいては、放課後の居場所として、集団生活の中で宿題や遊びなどを行っておりますが、他の学年の児童とも交流をすることになります。また、長期学校休業中は、一日の生活の見通しを持って過ごさせるように工夫し、昼食作りや、館外活動などを実施して児童に多様な経験の場をつくっていく工夫をしています。そういう中で、他の児童とのコミュニケーションを深め、自己肯定感を醸成する取組を実施するようにしています。

また、児童館では、ボランティア活動により主体性や社会性を育てているほか、児童館事業の企画から運営までを児童が行うことで、達成感を感じられるような取組を行っています。

○区長 続いて、教育委員会では、小・中学校でどのような取組をしているのか、説明をお願いします。

石坂指導室長、お願いします。

○区長 指導室長の石坂でございます。

まず、学校での取組ですが、墨田区教育施策大綱においては、課題として学力向上について、自己肯定感や自己有用感を高めることができる力を育むことというふうに示されており、他人の役に立ち、認められたりする機会を持たせることを通して、醸成することと示されております。

また、すみだ教育指針の5つの目標の1つとして、目標2「豊かな人間性の育成」を定めています。取組の方向として「心の教育を大切にし、児童・生徒が自分自身の存在意義を感じ、主体的に物事や学習に向き合い自己有用感及び自己肯定感の醸成を図る」と示されています。

また、さらに、本区の定める主要な教育課題では、「幼児・児童・生徒の自尊感情を育み、自己有用感及び自己肯定感、意欲、探究心、粘り強さ、協働性等の非認知的能力を高める取組を推進すること」としています。

これらに示された内容を基に、具体的な方策として、例えば日々の授業におけるジグソー学習の手法等を活用した話合いや友達と関わり合う活動ですとか、授業の終わりの時間や行事が終わった後に、自分の成長の振り返りを行うことによる、人の役に立ったと感じられる



経験ですとか、自分の力の伸びを感じられる時間を確保するというものがあります。

この中で、ジグソー学習というものが、テーマや学習について、役割分担をして調べていき、調べて分かったことを互いに発表し、教え合う学習の仕方のことを言います。自分の担当する内容について責任を持って調べることで、自主的に学ぶ力を育むことができます。また、互いに調べたことを教え合うことで、協調性や友達の学びの役に立つことができたという自己有用感を育むことができます。

また、学校では、授業だけではなく、全ての教育活動において、教員は児童・生徒の取組を認め、価値づける指導を行っております。例えば当番活動や係活動、班活動、高学年における委員会活動などにおいて、児童・生徒それぞれに役割を与え、その活動の中で人の役に立つことのすばらしさや大切さについて気づかせるような指導を行っております。

また、小学校での縦割り班活動、中学校での部活動等といった異学年での交流において、下の学年への子への思いやりの心、適切な言葉遣いや対応力を身につけ、他者を大切にする心情とともに、相手の役に立っているという自己有用感が高まり、結果として自己肯定感を高めることにもつながっていると考えております。

○区長 ありがとうございます。

子ども・子育て支援部から、保育園・児童館・学童クラブにおける取組の状況、そして指導室から、学校現場、学校での取組に、これについてのご説明がありました。

阿部委員、先ほどのお話の続きとして、今説明があったそれぞれの取組を踏まえて、またお考えがあればお願いします。

○阿部委員 いろいろな観点からのご説明、ありがとうございます。区や教育委員会の取組についてよく分かりました。

また私の個人的な話になって恐縮ですが、自己肯定感といいますが、それぞれの人の考えや体験を通じて形成されていくものなので、いろいろ違いがあるのかなというふうに思います。私が幼児や小学校低学年の頃は、親とか学校の先生に受け入れられたと感じたり、あるいは褒められたりすることで、十分自己肯定感が備わるというか、自己肯定感がつく方向でプラスになったのではないかと思います。やはり、小さいうちは大事にされている、周りから愛されているということが実感できること、要は褒めて育てるみたいなお話が十分効果があるのかなと私は感じています。

ところが、だんだん小学校高学年になってきて、特に思春期に入りますと、褒められたとしても、うれしいのですが、反面、成長過程で相手が本当にどこまで自分のことを理解して

評価してくれているのか、素直に受け取れないように感じたように覚えています。

先ほど事務局の説明であった資料の中に、若者の意識に関する国際調査というのがあって、確か、日本の子どもたちの自己肯定感を諸外国と比べると数値的に低いという結果が出ているということでした。ただ、私は個人的にはあまり気にするべきではないと思います。日本的な感覚でいえば、自分の能力をアピールすることは、何か自分のことを自慢しているように思われたくないという感覚があるのではないかと考えています。そのため、謙遜して少し割り引いて言っているのかなと想像しています。

ですから、自分の長所をアピールするのか、あるいは自分の欠点や短所をなくすことを評価するのかということで、とらえ方の指標が違うのではないかと考えて、あまり数値にとらわれる必要はないのではないかと考えています。

さらに、先ほどのデータで学力の観点でいえば、PISAのデータで極めて日本の子どもたちは頑張っている成績を出しているから、それほど自己肯定感を低く見ていると捉える必要はないのではないかと考えています。

それで、話を元に戻しまして、私にとっての自己肯定感についてですが、大人になってから気づいたというか、あるいは自分で決めたことですが、思春期を越えると自我が目覚めますので、表に見せている自分と内心の本当の自分という2つの人格が存在します。もし自分が決めたことをやり切って頑張ったのであれば、仮に結果が失敗になったとしても、自分は内なる自分と取り決めた約束をちゃんと守ったという、深いところでは自分に納得する気持ちが湧きますので、それが自信の源泉になるのかなと思います。逆に、何か理屈をつけて、怠けたりして失敗すると、駄目な自分を見せつけられる、内なる自分ではこれを認めざるを得ないということから自信をなくしていきます。

ですから、自分で決めたことは、とにかく徹底してやる、自分との約束を守るというのを私のモットーにしているから、それが自分にとっての自己肯定感の源泉だと思っています。

これは特殊な考え方かもしれませんが、皆さんそれぞれ、いろんな体験とか環境で、自分なりにそれぞれの自己肯定感をつくる力があるのだと思いますので、皆さんの体験とか、子育ての過程で気づかれた点などをお教えいただければと思います。

○**区長** 阿部委員から、非常に細かいところまで整理、分析をされていて、様々なご意見をいただきました。年代ごとにこの自己肯定感を考えていく必要があるというお話でした。

それから、自分のご経験ですね。非常に貴重なお話もいただきました。

そういう中で、それぞれ3名の方々、委員の方々にまたお聞きしたいと思いますが、まず

小山委員、幼稚園の園長先生を経験されて、小・中学校の校長も経験されて、大学の教授も経験しているということですので、それぞれ年代別の時間軸というか、その中で子どもたちの教育に携わったそういうご経験も含めて、自己肯定感についてご意見いただければと思います。

○小山委員 今お話いただいたように、時間軸や発達段階によって自己肯定感の育ち方は違うのかなと感じています。

特に、小さいうちは環境ということが大きく影響してくるだろうと思います。例えば、幼児期というのは、周りに親や幼稚園の先生、保育園の先生とか方がそばにいますが、そのような方を幼児はすごく信用、信頼しています。その人たちが自分を理解してくれる、そういうふうには子どもは認識していますので、そういう人から褒められたりすると自己肯定感が育っていくのだと思います。

よく他者受容感と言うこともありますが、自分のことを理解してくれている、そういう人から言われることが重要になります。ですから、幼稚園の園長をしているときも、全く知らない人から幼児が褒められていても、幼児はきよんとしているんですね。褒められてもそれが自分の心に伝わってこない。親とか、先生から言われるとにこにこしている。

それから、小学校、中学校に上がってきますと、今度は集団活動があったり、協働的な学びがあったり、そういう活動が増えてきます。そうすると、自分は他の子より何ができるのか、逆に何ができないのか、自分自身を他の人と比較するような、そんな環境に置かれてくることになります。そうすると、やはり自己肯定感、他の人から褒められたりすると伸びてくる、そのような感じがします。先ほどの言葉でいうと自己有用感ですね。周りの人から褒められて、その自己肯定感が伸びる。そのような時期かもしれません。

そして、高校や大学になりますと、人から褒められたりすることも大切なのですが、やはり自分で納得しないと駄目なような気がします。私は、現在、大学で教師の養成をしていますが、例えばその学生に、あなたはすごく教師に向いていると私が言葉をかけても、自分で教育実習やボランティアに出かけて、そこで子どもたちと接して、自分自身で教師に向いているのだという実感、納得をしないと、それが高まっていけないような気がします。

先ほど阿部委員がおっしゃっていたように、自己肯定感の発達の流れというのが、一般的にもあるのかなと思っています。

○区長 大変分かりやすいご説明で、うまく簡潔な例を出していただいて、今の年代別のお話というのは非常によく頭の中で理解ができました。そういう意味では、このご経験からの時

間軸という切り口でのお話でした。ありがとうございます。

続きまして、岸田委員、お願いします。

○岸田委員 自己肯定感は、阿部委員のお話にありましたとおり、自分への自信というのが基本になり、そしてその基本は乳幼児から生まれ、保護者に愛され、周囲の大人たちからも認められ、褒められ、そして叱られたりしながら育っていくものだとは私と思っています。

日本人の特性として、自分の子が褒められると、いや、そんなことないですよと言ってしまいがちですけれども、褒められた保護者の方は決して嫌な思いはしないと思いますし、褒められた保護者の嬉しさは、その子どもにも伝わっていくのではないかなと思います。

自己肯定感と自己有用感が非常に関係があると言われていますが、ほかの人から褒められたり、認められたり、そして人に喜んでもらえたりする、その達成感が自己肯定感を高めるのではないかなと思っています。例えば6年生が1年生の入学式のお手伝いをしたり、運動会で準備を手伝ってみたり、中学生が育成委員会の行事に協力してみたり、去年、幼稚園の運動会を参観したときに、職場体験をした中学生が前日から、準備や当日の流れを確認し、そして当日道具を一生懸命、場面に応じて替えている姿を見ました。園児たちもとても喜んでいましたし、先生たちも手が足りないところ、とても助かっていますということで、その手伝った中学生たちにしてみても、すごく達成感があつた、充実した時間を過ごせたのではないかなと思っています。人との関わりは、乳幼児、小学生、中学生、と次第に拡大していく中で、子どもたちに接する先生の関わり方が大切になり、先生の存在というのはとても大きいのではないかなと思います。

先日、区立の小学校連合展覧会でとてもすてきな絵がありました。それは本当に淡い色のタッチで、真ん中にソファが置かれている絵だったのですが、そしてそこに日差しが、明るい日差しが描かれている作品でした。説明文に、先生が隣に座って、自分の話をいっぱい聞いてくれた大切なソファですというふうに書かれていました。そのお子さんにとって、そのソファは、隣にいてくれた先生が「大丈夫だよ」と自信と安心をもたせてくれた大切な場所だったのだと思われ、とても感動した絵でした。

自己肯定感はこのように人との出会い、幼児も小学生、中学生も先生との出会い、そしてその日常のやり取りの中で育まれてくるものではないかなと思いました。

養育困難家庭や虐待されて育ってきたお子さんでは、私も少ない経験ですけれども、卒業まで目立たないように、本当に目立たないように学校生活を送っている子ども、以前教育委員会の中で岡田委員が、小さい声の子どもたちというふうに表示されたのですが、本当に目

立ってはいけないのではないかと思うぐらい押し殺している子どもと、逆にここまでやるのかと思うぐらい、暴力だとか友達とのトラブルを起こしてしまうという、その両極端になっていたような気がします。

そういう暴れている子どもたちを校長先生が校長室に連れて行って、気持ちが落ち着くまで話を聞いてあげるといような場面も目にしました。そういう虐待されている子どもたちの信頼できる人、そのケースは先生だったのですが、SOSを自ら発信し、そして無事施設に保護されて、今では安心した生活が送れ、クラスでも1番、2番を争うぐらい勉強に励んでいる子どものケースもありますし、また中学校で、問題ある行動をしていた子が、面倒見のいい社長さんと出会い、そして今、社会人として一生懸命働いているという例も聞きました。やはり、人との出会いだと思います。

ただ、ヤングケアラーの場合はちょっと自己有用感捉え方が難しいところなのですが、小さいときに、本当によくお手伝いしているね、頑張っているねという言葉が基盤にあるものですから、辛いということを発信できなくて、かえって重荷になってしまったという話も聞きました。それでも、信頼できる人に出会って、自分の幼いときのことを話し、そして経験を親身に聞いてくれたことによって、初めて泣き、自分を吐露できたということで、そこから自分の経験を活かし、ヤングケアラーの子どもたちを、今度、自分で支えてみようというNPOをつくったという話もテレビで見たことがありました。

やはり、自己肯定感自分の心の問題でもありますけれども、自己肯定感を育ててくれるのは人なのかなという気がしています。

○区長 ありがとうございます。

人との関わりの中で自己肯定感が育っていくということを具体的な例を交えてお話いただきました。先生との関わりによって、子どもの心が育つということ。さらに、ヤングケアラーは、このことをどういうふうにか考えるのかという、非常に興味深い問題提起、そしてなかなか難しい問題だと、率直に今、感じたところです。

それでは、岡田委員、お願いします。

○岡田委員 今、岸田委員から子どもの自己肯定感というのは人との関わりの中で育まれていくということについて、例を挙げてご説明いただいたところですが、そういう意味で、特に幼少期から義務教育ぐらいまでの期間を念頭にイメージして申し上げますと、子どもにとって一番身近にいる大人は誰かといえば、当然家族であり、親であるわけですから、家庭における親の姿というのがすごく大事なのだと思います。やや理想論に過ぎるかもしれませんが、

やはり親が充実して仕事をして、こういう役に立っている、こういう仕事ができるという姿を子どもに語らずとも見せることが、今の自分に満足している、今の自分が好きだ、家族が好きだという、そういう自己肯定感のベースにつながっていくのではないかと考えています。

一方で、親ガチャなんていう言葉が流行るような深刻な家庭間の経済的格差の問題もありますから、実はそれはすごく深い問題なのかもしれなませんが、仕事じゃなければ、例えば地域活動や趣味でもいいと思うので、親が生き生きとしている姿を子どもに見せてやりたいと、保護者世代として思っています。

少し今日の本質的な議論からは離れてしまうかもしれませんが、子どもに対して親のいいところを見せるという意味で、学校の教育の現場にもう少し親がボランティアの形で関われる機会があるといいと常々思っています。私の娘の小学校では、冬の期間、学校の外周の道路を使って持久走大会をやるのですが、交通の安全を確保するために、親が道々に立って誘導します。結構な人数が必要になるのですが、それをボランティアで募集すると、大勢の方が手を挙げてくれます。昨今PTAの在り方がすごく問われていて、PTA離れが言われる中で、自分の子どもたちの教育に直接役に立つことはやりたいという親は多いように感じます。ですので、ぜひPTA出身者としても、そういう親の活用を学校で考えていただけないかと思っています。

それから、もう一つ、問われているのは、学校での教育について、もちろん義務教育世代の子どもたちは、平日の大半を学校で過ごすわけですから、学校での環境もすごく大事だと思います。そのためには、子どもたちがまずは安心して通える学校、楽しく過ごせる学校、そういうものをつくっていただきたいと思っています。

先生方には楽しい授業の工夫、楽しい学校の環境づくりというところで苦心していただいているとは思いますが、そういった工夫もさることながら、まずベースとして、先ほど少し話題にも上りましたが、いじめの芽、これを徹底的に拾って、どんな小さな芽でも潰していただきたいと思っています。

それから、これは実は前回の総合教育会議でも申し上げたのですが、先生の中にはどうしても子どもに対して感情的に当たってしまう、子どもを追い詰めてしまうという話がちらほらと耳に入りますので、そういった威圧的な態度であったり、先生の感情的な発言というのは、怒られている子だけではなくて、周りの子にとってもすごくストレスだというふうに実際に娘からも聞きましたので、周りの先生方、ぜひそういった例を見たら、フォローしてあげていただきたいと思っています。

話を戻して、小学校の高学年ぐらいからになると、これも先ほど小山委員からお話がありました。集団生活の中で、我々はどうしても自己肯定感という、教師が子どもにどう働きかけるとか、親が子どもにどう語りかけるかということにフォーカスしてしまっていますが、むしろ高学年ぐらいからは、友達との関係の中で、友人同士の関係性の中で自分の立ち位置を見て、自己肯定感を醸成していくのだらうと思います。

先ほど区長から剣道のお話が出たので、私は高校と大学はラグビー部に所属しており、区長と違って、練習に着いていくだけで精いっぱいだったのですが、スポーツそのものから得る、例えばフェアプレー精神やチームプレーの精神ももちろんありますが、どちらかというと、友人たちから手を抜いていると思われぬように、自分も頑張っていると思われるように、そういう意識の中で必死に食らいついていったような記憶がありまして、でもそれはそれで、大人になった今になると、よく頑張ったなど一つの自信の要素になるわけです。

話を戻すと、小学校時代なんかですと、受験が無いせいもあるんですが、自分の幼い頃を振り返って、あの子は頭がいいから、成績の良し悪しというよりは、もっと違う、例えば運動会で足が速いとか、遠足に行ったら他の子の面倒をすごくよく見ていたとか、動物の世話をとてもよく見ていたとか、教科の学習以外の学校行事であるとか、学校教育の中での余白というか、遊びというか、そういう時間の中で子どもたちは何か他人のいいところを見つけたり、褒めたり、褒められたりという経験をするのではないかと思います。

学校行事でいえば、例えば主役でスポットを浴びる子以外にも、頑張って緊張して歌ったよと、それをご家族が見に来て、今日ちゃんと見られたよ、頑張っていたねと褒めてあげる、そういう経験が、特に小学校時代は子どもたちの自己肯定感の土台になるのではないかと思います。これは一方で、前回話題になった教員の方々の働き方改革にも関わることですので、それとのバランスはもちろん見なければいけませんし、部活動であるとか、学校行事、今の形のままでなくてもいいと思いますが、そういった教科以外の時間、それから保護者が見に行ける、参加できる時間というのは、保護者の立場としては今後も残してほしいし、充実させてほしいを思っています。

○区長 やはり、委員の皆さん、それぞれのお立場というか、今、岡田委員からPTAの役員、会長を経験されて、子どもたちをつぶさに見てきた。それから、親という、家庭での役割にも触れていただきました。さらに、学校現場の中でもこういうふうにしたらいいいのではないかと、非常に分かりやすい、ご意見であったと思います。

それぞれご意見ありましたが、これらのご意見を踏まえて、もう一度、小山委員から少し

お話を聞かせていただければと思います。

○**小山委員** 私も、委員の皆様の意見を伺って、現場だったら、こういうこともできるな、ああいうこともいいなとすごく感じたところです。

自己肯定感を高めるというのは、学校現場でもすごく大切にしているところで、様々な方法があると思いますが、一つ、キャリア教育という視点もあるのではないかと私自身は思っています。

今日の会議の冒頭で、宮本教育委員会事務局次長から資料の説明がありましたが、その資料の4に、文部科学省の調査がありました。自分には良いところがあるという質問に対するものです。この資料は、令和5年度のものですが、実は10年ぐらい前からこの結果を見ていきますと、10年前と比べると、小学校はほとんど変わらないのですが、中学校は肯定的意見が1.5倍になっています。

では、なぜ中学校だけこんなに伸びたのかいろいろ調べてみますと、毎年、なりたい職業が発表されていると思いますが、10年前のなりたい職業と、今のなりたい職業を比べますと、中学校の子どもたちのなりたい職業に新たなものがいろいろ入ってきていることが分かります。例えばプログラマーとか、eスポーツの選手とか、そういう新しい職業が増えてきている。進路の視野が広がることで、自分はこういうところが生かせるんだと、自分のよいところを見つけることができ、自分自身を好きになる、そういう意味でキャリア教育というのが大事になっているのではないかと感じています。

コロナ禍で不登校がとて増えてきていると言われていています。校長会、園長会などの研修会でも、不登校について講師の先生を呼んで勉強されていると聞きますが、その中でも、不登校生徒の支援、それは学校に登校するという、その結果を目標にするのではなくて、子どもたちが自分自身の進路を主体的に捉えて、社会的に自立する、そういうことが目標だというお話があり、まさにこれはキャリア教育ではないかなと思っています。

そういうことで、墨田区では、キャリア教育も進められていると思いますが、具体的にどんなことに取り組んでいるのか、ご示唆いただければと思っています。

○**区長** それでは、石坂室長、今、キャリア教育というようなお話がありましたが、区の間組について、説明をお願いします。

○**指導室長** キャリア教育と不登校児童・生徒への対応についてご説明します。

まず、キャリア教育におきましては、人間関係形成、それから社会形成能力、自己理解や自己管理能力、課題対応能力、キャリアプランニング能力の4つの基礎的・汎用的能力の育



成を目指すこととしています。中では、自己理解・自己管理能力は、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づいて主体的に行動するとともに、自らの思考や感情を律し、今後の成長のために進んで学ぼうとする力になります。この能力は、まさに自己肯定感につながる力であると考えております。

本区におきましては、キャリア教育を教育課程に位置づけています。小学校では、生活科や総合的な学習の時間において、地域や様々な職業に携わる方々の協力を得て、職場見学や職業調べ、インタビュー活動などを行っています。中学校においては、企業や保育園などでの職場体験など、社会とのつながりを実感できる活動を取り入れるなどを行っています。様々な役割を教育活動の中で果たす中で、自らの役割の価値ですとか、自分と役割との関係を見いだしていく積み重ねを通して、児童・生徒の自己有用感及び自己肯定感の高まりにつなげていくようにしております。

次に、不登校児童・生徒への支援についてです。

委員ご指摘のとおり、不登校児童・生徒の数は増加傾向が続いております。本区においても、不登校の未然防止、早期対応が喫緊の課題となっております。

本区におきましては、学校での学びが児童・生徒の将来の可能性を広げ、社会的な自立につながることを考えており、学校復帰を第一の目標とする支援の充実に努めているところです。

不登校の最も多い要因としては、学校からの報告では、無気力や不安があります。これは、学校生活への自信の意欲を失い、自己肯定感が著しく低くなった状態であると考えております。また、一度不登校になりますと、学習の遅れを感じたり、友達とのつながりや関わりが希薄になるなどして、一層不安感が強くなっていくという傾向がございます。これらの改善のために、当該の児童・生徒の個々の状況を踏まえながら、自信を取り戻すこと、そして不安を取り除くための支援が必要であると考えています。本区では、学校内外に当該児童・生徒の居場所づくりを進めていけるよう、様々対応しているところでございます。

**○区長** 今、学校におけるキャリア教育の推進、それから不登校児童への対応について、事務局から説明してもらいました。

それを受けて、また小山委員、お願いします。

**○小山委員** ありがとうございます。学校でどのような取組をしているのか、大変よく分かりました。心強く感じます。本当にありがとうございました。

私から、もう一つよろしいでしょうか。

**○区長** はい、どうぞ。

○小山委員 私が今勤めております東京未来大学とすみだ教育研究所、実は共同研究を以前にしておりました、その中で、自己肯定感についても一緒に研究をさせていただいております。そのときは、自己有用感、先ほど申し上げた、ほかの人から褒められること、この自己有用感が育まると、自己肯定感、自分のことが好きだよということが育まれていきます。そして、その自己肯定感が育まれてくると、自己効力感、自分はこのことができるんだという自信とか、それから自分がより好きになる、そのような自己効力感が生まれて、それが学習にもいい影響を及ぼして、問題が解けるのが楽しいとか、知識が増えるとうれしいとか、そういう学習意欲の向上につながる、そのような研究を一緒にさせていただいたことがございます。

自己効力感、先ほどの自分是可以、問題が解けるとうれしいとか、こういう自己効力感を育むためには、先ほど石坂指導室長から説明があった墨田区が今推奨しているジグソー学習が、すごく効果があると私自身考えています。ジグソー学習については、先ほど室長から説明がありましたが、ある課題に対して、子どもたちが役割を分担して調べたり、発表したりする学習方法です。分担された内容について、その子どもたちだけが調べるのではなく、分担した子ども同士が、お互いに自分の調べたことを共有し、更に知識を深めていきながら、その成果を発表しますので、責任感とか自信が生まれます。そこから子どもたちはこういうことができるんだと自己効力感を育むことにもなります。そういうことで、ジグソー学習を進めている墨田区は、すごくいいなと私は思っています。

それから、先ほど不登校の子どもの方がございましたけれども、自殺者も今増えていることが社会問題になっています。子どもが自殺に追い込まれる心の様子ですが、やはり皆さんもご存じのように、私なんかいなくてもいい、生きていても仕方がない、そういう無価値観だと言われています。そのために、レジリエンスと呼ばれる逆境やトラブル、強いストレスに直面したときに適応する精神力、心の回復力を高めることが大切だと言われていて、それは子どもの力、それから子どもを取り巻く環境の力、そしてやればできるという自信、あなただったらできるという励まし、そういうものがとても大切だと言われています。

そう考えていきますと、今お話をされている自己有用感や自己肯定感、自己効力感を高めることがこのレジリエンスを高めることにもつながると思います。今回の会議の冒頭で区長からお話があったレジリエンスを高めるということにつながるのではないかと思います。

自己肯定感について、私は学校の立場でお話させていただきましたが、先ほど岡田委員からお話があったように、保護者の方の子どもへの理解や、学校と家庭の関わり方など本当に大

切な要因だと思いますので、ぜひこの後も墨田区の教育委員会としていろいろと研究していただいて、先生方だけでなく保護者の方を対象とした研修会も進めていただくと、墨田区としてもいいのではないかなと思いますし、この総合教育会議で自己肯定感を議題として取り上げた価値、効果はあるのかなと考えています。

○**区長** この総合教育会議の場で、大変いい議論ができていますと私は思いますが、これをいかに今後に活かしていくかというご提言も今いただきました。

さらに、レジリエンスを高めることが大事というのは、まさにそうだと思いますし、このレジリエンスという概念、力、これはウィズコロナの世界を生きるために必要不可欠な力だと、お話聞いていて思いました。

あと、今日ずっとお話を聞いていると、子どもを褒めて伸ばすと、一時期そういう教育方法が話題になって、自己肯定感を高めるにはやはり褒めなくてはいけない、褒めてあげることが大事だという考え方があります。子どもはそれぞれ性格も違えば、そういう中で全てのお子さんを褒めるにはその子の良いところを見いだししていくことが必要ですから、逆にそれも教員の力なのかなと思ったりもします。よく観察をしていないと、なかなか褒めるのは難しいと思います。鋭い観察力や長所を拾い上げる力、伸ばそうとする力が必要ですし、そういう姿勢も求められてくると思います。

先ほど、学校現場に期待するところということで岡田委員からお話があったので、もし褒める褒め方みたいところで、何かあればお願いします。

○**岡田委員** 確かに、褒めることは大事ですが、ただ褒めてあげればよいということではないと思います。いいね、いいね、いい子、よくできたよと言っていても、子どもの心にやっぱり刺さらないんだろうと思います。ですから、頭で考えれば、やはり子どもの、今君がやった行動のどこがすばらしかったのか、その行動のこういうところがすごくよかったとか、君の発言の今ここはすごく人のことを考えてよかったというふうに、具体的によかった資質、よかった行動、言動を指摘して、それを褒めてあげる。ちょっと表現を変えると、それがその子を認めてあげる、その子のいいところを認めてあげるということなんだと思います。

もちろん理念的には、私もどうやって褒めるのかなと考えたときには、そういうことが思いつくのですが、さりとて、日々の忙しい家庭で子どもの育児をしている中で、反射的に子どもをそういうふうに上手に褒められるかといったら、正直自信がない。だから、先生たちをお願いしますというのは無責任かもしれないのですが、やはり幼稚園からの教育の場で、習慣というか、学習の積み重ねとして、先生方が子どもの言動を具体的に指摘して認めてあ

げるということを続けていただくことが大事なのかなと。

私の甥っ子のお話なのですが、小・中・高をアメリカで育て、コロナ禍でしばらく遊びに来られなかったのですが、先日、正月に、3年ぶりに日本に遊びに来てくれて、ちょうど二十歳になったのですが、私も久しぶりに姉と会えて、家族や実家の今後の話など、要は大人の込み入った話をしていると、その甥っ子は本当に臆せず、これはこうした方がよい、ああした方がよいと思うみたいなことを臆せず意見するわけです。これは、面白いと思いました。彼は両親とも別に純血の日本人ですから、DNAとか脳内ホルモンの話ではなくて、恐らく育った環境であるとか、教育で、本当に臆せず意見を言うということを経験したのだと思います。もちろん、幼い意見もあるのですが、なかなかよいことを言う。多分ですが、アメリカでは、小さい頃から、発言してごらん、君の発言はすごくいいことだよという、そういう経験を重ねてきたのだと実感した次第です。

岸田委員からもありましたが、もともと持って生まれた性格だとか、それから環境要因なんかもあるって、なかなか大きな声を上げられない子、声が小さい子というのが一定数いますから、できるだけ小さいときからそういった子たちにも、いいんだよ、発言してというような、そういう促しを先生方にはしていただきたいと思いました。

○区長 ありがとうございます。

今、褒め方というところのお話で、岡田委員ご自身の経験談を交えながらいろいろなお話がありました。学校現場としてという意味で、小山委員、もしあれば、ご自身の経験談をお願いします。

○小山委員 私も中学生や小学生に、直接関わっているときに、自分なりにポイントとしていた褒め方というのがありました。自己肯定感を高めるときに、私自身は結果を褒めない、過程を褒めるということを肝に銘じていまして、校長になったときもそのことを教員に話していました。

例えば中学校のとき、英語検定というのがとても盛んでした。学校を会場として英語検定を実施するので、たくさんの生徒が受けます。そのため、月曜日の朝礼で、合格した生徒は、何級に合格と名前を呼ばれて、起立して、みんなから拍手をもらう。そんなような表彰をしていました。

でも、なかなかその英語検定を受けようとしなかった英語がすごく得意な生徒がいました。その生徒にどうして受けないのか聞いたところ、いつも自分は英語よくできるねと先生にテストを返してもらったときに言われているので、英語検定を受けて、万が一、落ちてしまった

ら、恥ずかしいのでという理由でした。英語がよくできるねとすごく褒められていたことが、逆にその生徒にプレッシャーやストレスを感じさせていたのだと感じました。

やはり、英語がよくできるね、英語いつも100点だねというと、またよくできなくてはいけない、100点取らなければいけない、そういう気持ちにさせてしまいます。そういうことを褒めるのではなく、もし100点を取ったら、毎日勉強していてえらいねとか、英語ラジオを毎日聞いて頑張ったねとか、やっているその努力を褒めてあげれば、結果にとらわれず、子どもたちは自己肯定感が伸びるのではないかと感じましたし、そういうところを自分自身で気をつけていました。

○**区長** 今、褒め方の議論、結果ではなく過程を褒めるというお話がありました。まさにありますよね、優勝おめでとうと、それをやるんだけれども、次につながるかどうかということが。いろいろそういうことを思いながら、教員の方々にも頑張っていたきたいと、そういう感想を持ちました。

いわゆる褒め方、褒めて伸ばす、自己肯定感を高める、このお話の続きで、逆に、下げってしまう原因、例えば先ほど先生が感情的に怒ることによって、ストレスになってしまったり、壁にぶち当たってしまったときに、下げってしまう要因は何なのかなというのも気になるところです。

褒め方、またはそれを下げってしまう要因、この辺で、阿部委員、何か考えることがあればお願いします。

○**阿部委員** 下げる要因はいろいろあると思います。周囲の心ない言動で傷ついたりとかということもあると思いますが、基本的には失敗した経験とか、怒られた経験とか、あるいは周囲の期待に応えられないことで評価が下がるのではないかと悩んだりすることが、私の場合は非常に自己肯定感を下げる要因になったりしました。

お子さんそれぞれ、楽観的な明るい子どももいれば、非常に悲観的、あるいはいつまでも悩むタイプのお子さんもいれば、あるいは失敗を恐れてリスクを取らないというような、今のお子さんはそんなような感じがあるようなので、それぞれその性格や家庭の環境で、あまり怒られると失敗を恐れて、失敗しないような選択をしてしまうということがあるかと思います。

そうすると、お子さんはそのときに嫌だなと思った感じをため込んでいくと、同じような経験をしたくないものですから、どうしても悲観的になったり、あるいは失敗を恐れて消極的になったりというようなことがだんだん負のスパイラルみたいになって、自信を失ってい

く原因になるのかなと思います。

私の場合、先ほどのお話に戻りますけれども、そういう状態になると、さらに自分が弱い、駄目だなというように、自分自身で傷つくみたいになります。マイナス作用が働いてしまうことがあったように思います。

自己肯定感を失って、自信をなくしていくと、今度、自分で自分のことが評価できないから、周りの評価を得ようとして、内心とは別に周りに迎合する傾向がどうしても出てくるのかなと、自分の子どもの頃を思うとそんなようなことを感じました。

そこで、周囲の大人としては、それぞれの子どもたちの性格とか個性に即して、褒めるにしても、叱るにしても、効果的な方法を考えていただきたいなと思います。

要は、感情的になるなどといっても難しいので、やはり本心で子どもたちのプライドを傷つけないように、先ほどいろいろお話が出たように、結果ではなくプロセスを認めてあげる、そうすれば子どもは多分、そこに救いといいたいでしょうか、やる気を出してくれるのではないかなと思います。ですから、そういう褒め方を、先ほども他の委員からもお話が出たように、認めてあげるということをすれば、失敗してもきっと立ち直るエネルギーが湧いてくるのかなと思います。

あと、少し技術的なことですが、ポジティブシンキングみたいなトレーニング、落ち込んだり、ダメージを受けたときに、どうやってそれを心理的なコントロールを働かせるようなことも、多分子どもたちとしては学ぶ機会があると良いのかなと思います。そういう状態から脱出するといいたいでしょうか、そういうのをトレーニングみたいな形で学べば、随分楽になると思います。

また、岡田委員のお話のように、周囲とコミュニケーションを取って、自分の意思を表現できる、自分の気持ちを表現できるようなトレーニングも効果的だと思います。

さらに、私の体験からすると、大人が子どもにいろいろ体験させるというか、学校の授業以外での職場体験とか、大人との接点でいろんな行事に参加させ、役割を持たせることで、仮に落ち込んでいても、そういう体験をすることで、また積極的な考え方に立ち戻れるのかなということ、とにかくいろんな体験させてあげれば、子どもたち自身も頑張れるエネルギーが湧いて来るのではないかと思います。

○**区長** 岸田委員、今の褒め方、それから下げる要因、何かあればお願いします。

○**岸田委員** 以前、教育デザインラボの石田理事長という方のお話を聞きまして、自己肯定感を下げる3つの呪いの言葉ということで、それは、「早くしなさい」、「ちゃんとしなさい」

い」、「勉強しなさい」だそうです。自分が子育てのときに知っていることができればよかったなと思いました。

逆に、自己肯定感を上げる10のマジックワードがあるということで、それは「すごいね」、「さすがだね」というような承認の言葉や感心したりする言葉、さらには「どうもありがとう」、「助かった」というような感謝の言葉、結局褒められたり感謝されると誰でもうれしくなるし、もっともっと頑張ろうという気持ちになるのだと、その講演を聞いたときに思いました。

「窓際のトットちゃん」を今読み返しているのですが、その中で、問題を起こすたびに、校長先生が「君は本当はいい子なんだよ」と、そのときに、その本当はという意味がどういふことなのかというのは分からなかったらしいんですけども、でもその言葉がずっと、黒柳徹子さんは前へ進むときの原動力の言葉になったそうで、もし、あのとき否定的な言葉を言われていたならば、今日の自分はなかったというようなことを後書きに書かれていたんですね。

君は本当に駄目なんだよね、何でそんなことばかりやるのと言われ続けている環境にいる子どももいると思います。ですけども、そこを救ってあげられるのは学校や、または地域かもしれません。先生の寄り添いは勿論大事ですが、地域でも例えば学校へ行く子どもたちを見て、「おはよう」、「頑張っているね」、「今日は早いね」というような1つの声かけでも、ひょっとしたら生きる力になるかもしれないし、自己肯定感につながっていくのではないかなと私は思いました。

○区長 ありがとうございます。

この自己肯定感をテーマに議論しようと思って、どういう展開になるかななんて自分でも思っていたんですけども、大変、今日4人の委員の方々それぞれ、非常に今後、私自身も、それから教育委員会としても参考になるお話をたくさんいただいたなというふうに思います。

加藤教育長、こうしたいろいろな切り口がありましたけれども、これらを踏まえて、教育長さんのまとめをお願いしたいと思います。

○教育長 いろいろ委員の方からも、そして区長の考えも、冒頭お聞きしましたが、自己有用感というのは、皆さんから出ていたと思うんですが、自己肯定感を育成していくにはやはり自己有用感は必要だと思います。

それで、子どもたちが人からの感謝、人から認められたという自己有用感、それから自分はこのことによって人から役に立ったと思われるようなことが、自己肯定感を育成していく

には、自己有用感というのはやはり中心に置いていくことが非常に有効であるなと思います。これは、やっぱり子どもは大人の姿を見ているということもありますので、人の役に立つ自己有用感というのは非常に有効であると。

ただ、自己肯定感については、高ければ高いほよいということではなく、高過ぎず低すぎずということが大事だと思います。

また、自己肯定感の持ち方は段階があるのですが、そんなにしっかりしたもの、強固なものではないというのが一方であると思います。その中で、さっきのレジリエンスというのが、ここで役立っていくと思います。これは、駄目になったときの回復力だとか、立ち直る力だとか、弾力性、それとしなやかさとかそういうことなんですけど、自分がしっかり自分を持っていて、困難を弾き飛ばす、強い意思も同時に育てていかなきゃいけないんだと思います。この強い意思を持つためには、自分がやはり人のためとか、誰かのためにということが非常にその強い力を持つ、自分のためよりも人のためということが強い力、意思を生むんじゃないかなと思っていますので、こういったことも同時に育てていく必要があると思います。

それから、墨田区の学校では、今年から本格的に動画とか何か、去年も作ったんですけども、ジグソー学習を今後展開していきたいと思っていますが、将来的には、子ども同士の教え合いとかも必要になってくると思います。

それから、このレジリエンスと自己肯定感とは、授業でやることも必要ですが、やはり日々教員や家庭、地域の方たちが評価をしていくということも非常に重要になってくると思います。

また、もう一つは、やはり学校で重要なのは、子ども同士の教員がいない休み時間の遊びでも自己有用感が発揮できる機会があると思います。また、学校の授業や、授業以外の校外学習でも、先ほど体験が必要だというお話もありましたけれども、ふだん授業であまり見せなかったのが、24時間一緒にいるわけですから、そのときに例えば生きる知恵とかをほかの子に言って、ほかの子が感心するとか、いろんな場面があって、それを受け入れる力や、それを評価する力も非常に重要になってくると思います。

また、学校で褒められることも重要ですが、やはり他の人や団体から褒めてもらうことも非常に重要で、子どもたちも喜ぶ要素になっていると思います。

それから、家庭についてです。先ほど不登校の話もありましたが、家庭で子どもに役割を持たせてほしいと思います。何でもいいですから、お父さん、お母さんが、子どもにやってもらったときにありがとうと言える、その子どもも、お父さん、お母さんがやってくれたと



きにありがとうと言える、そういった家庭を築いていただく。そうすることによって、子どもたちが自分の行動が役立っていると実感できると思います。

それから、墨田区は、地域でいろいろ行事をやってもらっています。地域の行事に子どもが参加することによって、大人たちと会話をしますので、それによって大人たちが何気なく評価したことが、子どもたちにとってはかなりの自分を自己肯定することになると思いますので、ぜひ、地域の方も今やっていらっしゃっていますけれども、引き続きお願いしたいと思います。

それから、先ほどの褒め方のことですが、これは結局認めるということになるのだと思います。それで、一般的に言われている「褒める」というのは、大人目線で、大人の基準で褒めたりすると思いますが、認めるというのは子どもが工夫したことを認めて、それで子どもたちがきちっと心に突き刺さるように認めるようなことをしてもらおうと、自己肯定感が高まっていくということですので、だから努力したとか、工夫したことについては必ず評価をしろ、気がつけば評価をしろというものは重要だと考えております。

○区長 家庭の中でありがとうと言う、言い合える関係、これも大変重要なことだと思います。一番簡単にできそうでできないことでもありますし、それをやっていくと何かが変わるということを今おっしゃったのだと思います。また、今日いただいた様々なご意見について、具体的な取組に落とし込んでいって、学校現場にそれぞれの切り口での内容を少し取り入れていただくということも、私からもぜひ教育長にお願いをしたいと思います。

それから、最後になりますが、いろいろなお話を聞いて、本当におっしゃるとおりだなということばかりでした。自分自身が心がけているというのは、例えば3,000人の職員がいますが、褒めるということもありますし、それから指導、指示を出すことももちろんあるのですが、やはり1対1でいくと、子どももそうなのですが、僕は子どもに対して、実は日曜日にタウンミーティング小学生版をやって、彼らは本当に自己肯定感をしっかり持っていて、前向きに、区長は必要なのですかと質問していただいたお子さんがいて、たじたじになってしまいましたが、そういうお子さんたちとのやり取りの基本は、この子は好感が持てる、好きだ、この子はこういう長所を持っているということ、常に1対1の関係の中で持ち続けるということが大事なのだと思います。

ぜひ、そういう愛情というか、そういう気持ちを持った上で、一人一人と接するというのを心がけていただくと、先生方も迷うこともあると思いますが、そういう思いでこれからも現場で頑張ってもらいたいということも併せてお願いをしたいと思います。

本日は、大変有意義な議論ができたなと思っております。まだまだ話し足りない感じもありますが、時間になりましたので、これで第19回墨田区総合教育会議を閉会させていただきます。

委員の皆様、どうもありがとうございました。

---

午前11時30分閉会